

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24617017

研究課題名(和文) 広報外交メディアとしてのノーベル平和賞の価値と展望

研究課題名(英文) Public Diplomacy and Nobel Peace Prize

研究代表者

羽生 浩一 (Hanyu, Koichi)

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：90433911

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：ノーベル平和賞が創設された背景に、19世紀における欧米の民主主義、民族主義の隆盛が存在した。時代の混乱と新しい価値観への希求が「平和」という概念を醸成した。平和の概念を広く伝える役割(PR)としてのノーベル平和賞の創設であった。ノーベル平和賞は20世紀の2つの世界大戦、およびその後の冷戦を経て、「欧米の平和賞」から「世界の平和賞」へと賞の意味や役割を、戦略的に変えてきた。ノーベル平和賞は、戦争や紛争を解決はしないが、注目すべき問題がそこにあることに人々の関心を集めさせる。武力を行使せずとも、広報外交的な役割で平和に貢献することが可能であることを示してきたのである。

研究成果の概要(英文)：In the background of the Nobel Peace Prize was established in the 19th century, the rise of democracy and nationalism were present in Europe and U.S. The confusions and aspiring to the new values of the era were fostering the concept of "peace". It was the founding of the Nobel Peace Prize as a PR or Media role to convey widely the concept of peace . The Nobel Peace Prize, through two world wars and then the Cold War in the 20th century, has changed its role strategically from the "Euro-American Peace Prize" to "World Peace Award". The Prize does not directly assist to end wars and conflicts, does often evokes controversy over the candidates, however, casts a spotlight over the issue that people should be aware of. Even without conducting of military force, the Prize has been shown that it is possible to contribute to peace in the public diplomacy role.

研究分野：文化学、ジャーナリズム、広報外交、社会学

キーワード：ノーベル平和賞 ノーベル賞 平和 冷戦 国際政治 広報外交 佐藤榮作 オーセ・リオネス

## 1. 研究開始当初の背景

ノーベル平和賞は、それ自体が世界の戦争や紛争を解決するものではないが、今日において、ソフト・パワーとしての「平和を広報するメディア」の役割を果たし、人類が解決すべき様々な紛争や困難に、人々の注目を向ける役割を果たしてきた。しかし創設当時は欧米に限られた平和活動家、組織に対する褒賞であった。本研究では、ノーベル平和賞が20世紀の激動の歴史と共に大きく変革を遂げ、今日のように国際社会で認識されるような「平和を広報するメディア(広報団体)」となったのが、第二次世界大戦後の冷戦期であったという仮説を立て、主に次の2つの点を強く認識するにいたった。

(1) ノーベル平和賞が、世界の「平和広報メディア」となりえた理由は何か。

ノーベル平和賞が“世界的な賞”となるまでに、1901年(20世紀初頭)に賞が創設されてから、アジア人初の授賞者が登場するまでに70余年もかかった。それは世界を二分した「冷戦期」のさなかのことであった。ノーベル平和賞は、長らくは欧米の平和運動家や平和に貢献してきた個人または団体に与えられる褒賞であった。だが、第二次世界大戦以降の冷戦期にそれは変化して行く。ノーベル平和賞は欧米中心の国際政治の動向と密接にかかわっており、逆に言えば、20世紀の世界平和秩序構築とは何だったのかを、ノーベル平和賞が反映してきた。

そのため、従来のノーベル平和賞に関する議論や研究は、政治学や国際関係論、平和学などの視点から捉えられることが多く、日本ではそもそもノーベル平和賞についての国際政治学的、通史的な研究や1974年の佐藤栄作授賞への批判的な議論が見られるばかりであり、海外の研究でも、授賞の妥当性に関するものや、賞の影響の有無、時代ごとにおける授賞傾向の分析が主なものであった。

だが、なぜ北欧の小国の民間財団が運営する賞が、今日のように圧倒的なメッセージ伝播能力を持つ「メディア」として成長してきたのか、という論点がこれまでの議論や研究では全く見落とされていた。さらに、“民間の”ノーベル平和賞が、ナショナル・ブランディングとしてきわめて有効であり、国家としてのノルウェーが国際社会に平和貢献するイメージをも確立し、むしろそのイメージを利用している。言い換えれば、ノーベル平和賞は、「広報外交」の手段として、絶大な存在感と影響力をも示しているのである。

(2) ソフト・パワーとしてのノーベル平和賞はいかなる影響を及ぼしてきたか

本研究に先立ち筆者は、冷戦期の1974年の佐藤栄作元首相への授賞を事例として、受賞した当事者(国)、授賞したノーベル平和賞委員会とノルウェー、その授賞劇の背景にいたアメリカの三つの立場から、アメリカと

の密約疑惑の渦中で佐藤が授賞に至った本当の理由と詳細な背景について主に国内に存在する史料を基に考察したが、この事例を挙げるまでもなく、一見不可解とされる授賞がキッシンジャーをはじめとして過去に幾例もある。だが、筆者はそうした不可解さの裏に、強いメッセージ性を内包するメディア効果的な戦略があるとの認識に至った。さらに、申請者はノーベル平和賞がソフト・パワーを行使するメディアであると定義づけ、多角的に読み解くことで冷戦後に民族主義が展開する現代国際社会の中での、ノーベル平和賞の存在価値と意義を捉えなおすことができるとの認識に至った。

発展的に研究を進めるためには、国内の一次史料、資料だけでは十分に論証できず、海外にも一次史料、資料を求めなくてはならないため、本研究資金の採択により、その遂行が可能となった。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、ノーベル平和賞の強いメディア性とその広報外交としての機能に注目しながら、次の三つの課題を明らかにしようと試みた。北欧の小国の民間団体が過去110年にわたって授与するノーベル平和賞が、(1)世界の「平和広報メディア」となりえた理由は何か(2)ソフト・パワーとしてのノーベル平和賞はいかなる影響を及ぼしてきたか(3)以上を踏まえ、どのような条件・理由があれば、広報外交の手段として、メディアは国際理解を促進し、平和構築で機能するのか。

## 3. 研究の方法

ノーベル平和賞をひとつの「メディア」として捉え、その成り立ち背景を、メディア学、歴史学、社会学などを援用しながら学際的な視座の中で改めて捉えなおし、創設背景、発展過程を明らかにし、今日的な価値を検証し、展望を見据えて行く。さらに、本研究はノーベル平和賞の先行研究の調査と分析という範囲にとどまらないため、プロパガンダ的機能を有するメディアの研究として、ノルウェーのみならず、欧米における「広報外交=パブリック・ディプロマシー」の長年にわたる豊富な実践例と研究についても調査することで、方法論の援用や比較的知見も得られる。

本研究は、【第一段階：事例研究】における授賞歴および対象、背景の研究の検討、および【第二段階：理論研究】における文献研究、【第三段階：統合】における事例の理論的検討からなる。第一段階の研究に関連する、授賞対象者らの受賞の理由、背景、広報外交についての研究の資料などが不足しており、これらを国内外の公文書館(ノルウェー、米

国、英国、日本など)や研究機関から収集した。また第二段階にかかる文献や情報を収集、分析する必要がある。ただ第三段階で得られる成果については、交流のある国内外の研究者と議論し補強を図った。

#### 4. 研究成果

本研究で得られた知見について概説すると、まずノーベル平和賞が成立した背景に、19世紀における近代ヨーロッパの民主主義、民族主義の隆盛が存在し、時代の混乱と新しい価値観への希求が「平和」という概念を醸成し、すでに一定の功績を挙げている平和活動家や組織を褒賞するための「平和賞」として創設されたが、20世紀初頭の第一次世界大戦、第二次世界大戦、さらに冷戦期の、三つの「戦争」と共に、ノーベル平和賞の意義や方向性に顕著な変化が見られたということである。また、冷戦期から欧米を主軸とした国際政治の動向に準じて、時代の変化に合わせてノーベル平和賞が戦争抑止力としての「平和広報」の役割を戦略的、主体的に果たそうとしてきたことである。本研究の最大の成果は、とりわけ冷戦期の核兵器拡散の脅威の中で平和賞の決定を左右したオーセ・リオネスノーベル委員会委員長の、国際政治の在り方を見据えた授賞決定の理念と戦略を未発見の公文書などから実証的に明らかにしたことである。加えて、ノーベル平和賞は、ノルウェーの国際社会における「平和国家」としての評価を維持するため、広報外交的な役割を果たしているとの知見も得られた。

基盤研究(C)として採択された三年間の研究では、計画時に想定したよりもさらに歴史的、国際政治的な資料・文献の調査や考察に膨大な時間が必要となった。先行研究が少なく、また多様な学問分野にも関連する学際的な研究であるため、その進展上で思いがけない発見や知見を得ることもあり、その一つ一つの考察、研究テーマ上にどのように位置づけるかの検討など、申請時の展望からは臨

めないことも多分にあった。そのため、3年間の時限内では、第一段階として、ノーベル平和賞の通史的な考察、第二段階として、冷戦期の重要な変革とその意味について考察し、成果としての発表も果たせたが、第三段階としての、今日的な「広報外交」との関連については、十分な研究発表が出来ていない。採択年度終了後も引き続き研究を進め、成果を発表し続けるとともに、次年度以降、本テーマから発展させて研究(「小国の広報外交の戦略」としてノルウェー以外のいくつかの国や地域の比較研究も)を手掛けて行きたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

羽生浩二「変革と挑戦 オーセ・リオネスとノーベル平和賞を巡る考察」Intelligence, 査読有、2015年16巻 掲載予定

羽生浩二「外交機密文書から見た、佐藤榮作ノーベル平和賞受賞と「二つの中国」問題」東海大学紀要 文学部 査読有 2014年第102号 37-61頁

羽生浩二「冷戦と佐藤榮作のノーベル平和賞」宇宙樹(北欧文化協会) 査読有、2014年11月 第228号 1-2頁

〔学会発表〕(計 3件)

羽生浩二「外交文書から見た、佐藤榮作ノーベル平和賞と『二つの中国』問題」20世紀メディア研究所第89回研究会、主催：早稲田大学20世紀メディア研究所、2015年1月31日、場所：早稲田大学20世紀メディア研究所(東京都新宿区)

羽生浩二「冷戦と佐藤榮作のノーベル平和賞」北欧文化協会2014年11月例会講演、主催北欧文化協会、2014年11月10日、場所：京橋プラザ区民館(東京都中央区)

羽生浩二「推薦文書から見た佐藤榮作のノーベル平和賞」放送大学情報化社会研究会、2014年5月24日、場所：NHK青山荘(東京都渋谷区)

〔図書〕(計 1件)

羽生浩二、大島美穂ほか「ノルウェーを知るための60章(エリア・スタディーズ 132) 333-338頁、(担当章)第53章：ノーベル平和賞 変貌する国際社会で、平和を提唱し続ける民間の賞、明石書店刊行、2014年

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

北欧文化協会 2014 年 11 月例会 招待講演  
<http://www.hokuobunka.org/> 例会の記録  
[/2014 年/](#)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

羽生 浩一 (Hanyu, Koichi)  
東海大学・文学部・准教授  
研究者番号：90433911

### (2) 研究分担者

なし

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし

( )

研究者番号：